

「盜跖と孔子と問答の事」(宇治拾遺物語)

今は昔、唐土に柳下惠といふ賢くて人々から尊敬されてゐる男がゐたが、その弟は盜跖たうせきといふ大盜賊で、大勢の惡黨を手下にして「よからぬことのかぎりを好みて過」してゐた。

或時、柳下惠は道で孔子に出逢つた。舎弟殿が「悪しきことのかぎりを好みて、多くの人を嘆か」せてゐるが、何故止めさせないのか、と孔子が問ふと、聞入れる様な弟ではなく、嘆くしかない有様です、と柳下惠が答へた。それなら自分が教へ諭してやらうと孔子が云ふと、どんな教へにも従ふ男ではない、「かへりて悪しきこと出で來なん」、お止めなさいと柳下惠は云ふが、孔子は、「人の身を得たる者」ならばいかな惡人でも「よきことを言」はれて従ふ事もあるもの、まあ、御任せあれ、さう云つて盜跖の許に赴いた。

孔子は盜跖の棲家の前で「魯の孔子といふ者なん參りたる」と云つて面會を求めた。盜跖が「音に聞く人なり。何事によりて來たれるぞ。人を教ふる人と聞く。われを教へに來たれる

か。わが心にかなはば、用ひん」、適はざれば身體を切刻んでくれる、と大聲で云ひ放つた時の形相の、「かくばかり恐ろしき者」とは孔子はついぞ思はなかつたから、肝を消して震へ上るが、堪へて云つた。人たる者は「道理をもちて身の飾りとし、心の掟」と爲し、上を敬ひ下を哀れまなくてはならぬ、「心のほしきままに、悪しきことをのみ事とする」は、今は良くても「終り悪しきもの」なのだから、「人はよきに隨ふをよしとす」。

すると盜跖が呵々大笑して云つた。「なんぢがいふことども、一つも當らず」、昔の伯夷はくいしゆく叔齊せいの如き「世に賢き人」は餓死したし、汝の最愛の弟子の顔回は「不幸にして命短し」、やはり汝の高弟の子路は衛の國で殺された。してみれば、「賢き輩は、つひに賢きこともなし。われまた悪しきことを好めど、災、身に來たらず」。それに、悪事も善事も世人が誇つたり褒めたりするのは精々四五日に過ぎぬ、されば「わが好みに隨ひてふるまふべきなり」。然るに汝は世を憚り上を恐れながら、二度も祖國の魯を追はれ、衛の國にもゐられない爲體、「など賢からぬ。なんぢが言ふところ、まことに愚かなり。すみやかに走り歸りね。一つも用ふるべからず」。

さう云はれて孔子は抗辯出來ず、走り出て馬に乗らうとするが、餘程怯えてゐたのか、轡くつわを

二度取り外し、鎧あぶみを頻りに踏み外した。世人はこれを「孔子倒れず」と評した。

鎌倉時代初期の成立とされる、「宇治拾遺物語」全一九七話中最後の話である。中程の第九十話にも、自分は世の政治を正す爲に行動してゐると語る孔子が、「痴れ者」奴がと老翁に嘲られて、その後姿を拜む話がある。物語全體の中の樞要な位置に孔子を虚假こけにする話を布置したのは、無論、作者の強い意圖が籠められてゐよう。事實、「わが好みに隨ひてふるまふ」者達の笑ひ話に馬鹿話、とんでもなく尾籠な話に數多い好色話の類こそは「宇治拾遺」の著しい特色に他ならず、「身の飾り」や「心の掟」をかなぐり捨てた、愚かしければ愚かしい儘の、弱ければ弱い儘の、下半身の持主たる在るが儘の人間の、といふよりも日本人の姿が頗る大らかに描かれてゐる。地藏信仰や觀音信仰に纏はる話も少くないが、それらは現世利益を専らとする即物的な信仰の在り方を描くものが殆どだし、地藏も觀音も甚だ寛大であつて、第八十三話の様に、罪人を赦す閻魔えんまの正體が實は地藏だつたといふ話迄ある。詰り「宇治拾遺」の世界では道徳も宗教も殆ど嚴しさを要求されない。何の事はない、目に見えぬ物への畏怖の念を失つた、今の我々にこそ一番馴染み深い世界ではないか。(新潮日本古典集成)